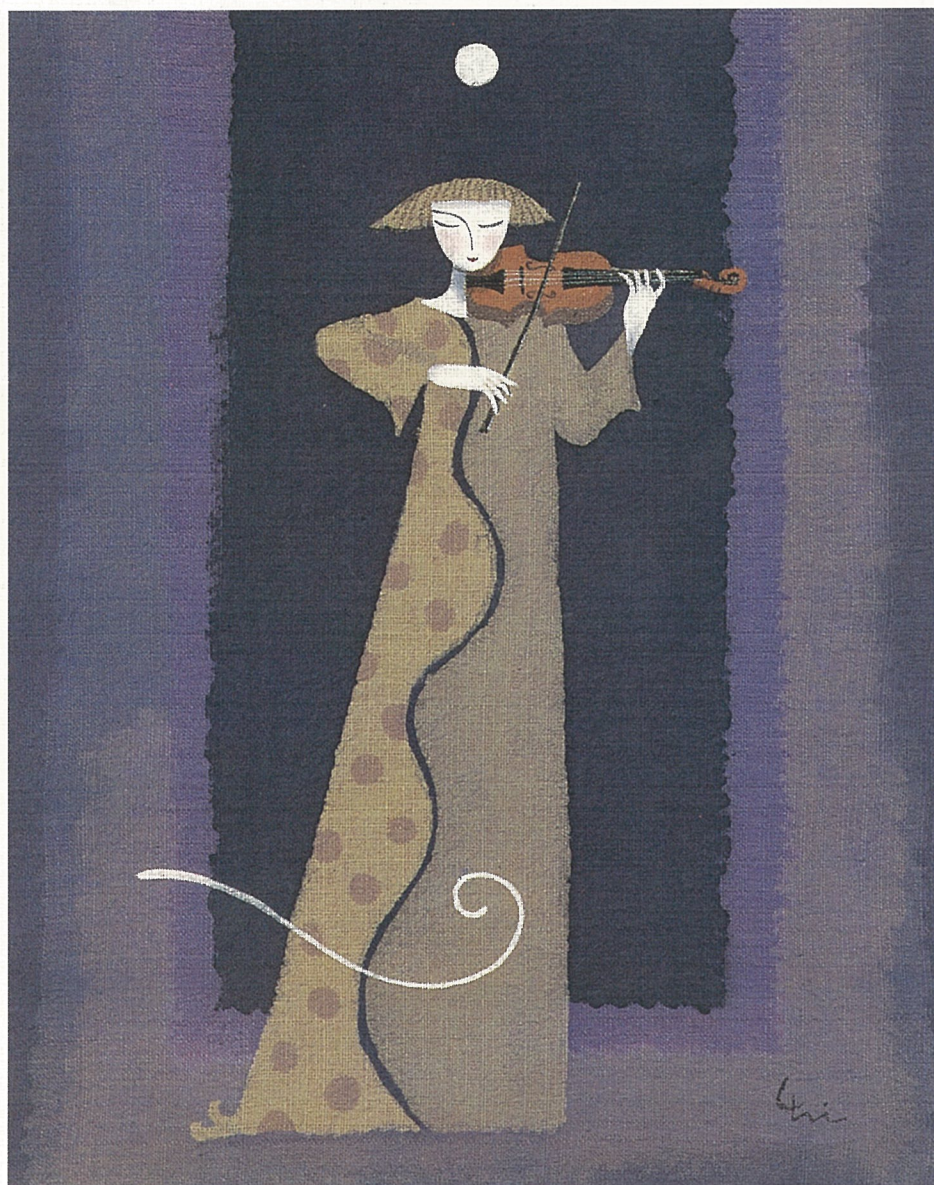


富山医科薬科大学

医学部同窓会報

2001.第10号



富山医科薬科大学
医学部同窓会報

2001.第10号



C O N T E N T S

4. 同窓会の皆様へ 医学部長 寺澤 捷年
5. 医学と音楽 一人づくり・地域づくりー 会長 高田 良久
8. 教授就任
人生、意気に感ず
弘前大学医学部分子病態部門教授 若林 孝一 (医学科 昭和60年卒)
若林孝一先生の教授昇任を祝って
放射線科 野村 邦紀 (医学科 平成元年卒)
医学部第1期生としての回想
麻酔科学教授 山崎 光章 (医学科 昭和57年卒)
山崎光章先生の教授就任を祝して
麻酔科学助教授 増田 明
山崎光章先生の麻酔科学教授就任を祝して
和漢診療学助教授 嶋田 豊 (医学科 昭和57年卒)
山崎教授ご就任に寄せて
富山赤十字病院脳神経外科部長 山谷 和正 (医学科 昭和57年卒)
18. 寄稿 南極に赴く
第41次日本南極地域観測隊 越冬隊医療 酒井 光昭 (医学科 平成7年卒)
20. 同窓会ホームページ、掲示板について
21. 特集 “卒業生の今現在、そして将来” Part 5.
福田加奈子 (医学科 平成6年卒)
高倉 大匡 (医学科 平成6年卒)
和田 努 (医学科 平成7年卒)
高川 順也 (医学科 平成7年卒)
糸村 美保 (医学科 平成9年卒)
林 伸一 (医学科 平成9年卒)
今西 信子 (看護学科 平成10年卒)
29. 大学内教室紹介
第一病理学教室 林 伸一 (医学科 平成9年卒)
保健医学教室 関根 道和 (医学科 平成7年卒)
内科学第二講座教室 供田 文宏 (医学科 昭和57年卒)
小児科学教室 本郷 和久 (医学科 昭和60年卒)
臨床看護学講座精神看護学教室 筒口由美子
-

「調べ」

ロウケツ染

染色工芸家。太平洋美術会賞受賞。各地工芸画廊をはじめ、最近では、1992年日本橋高島屋(東京)で個展を、また、94年とちぎ女流作家100人展に参加、99年銀座松屋にて個展を開く。いずれも好評を博す。栃木[蔵の街]音楽祭協力委員として地域文化活動にも貢献。栃木県岩舟町在住。

34. 厚生行政医官募集
37. 第52回西日本医科学学生総合体育大会部門別成績
38. パソコン窃盗事件の評議委員会決定処分について
同窓会理事一同
富山医科薬科大学評議会議事決定
富山医科薬科大学 評議会
ご父兄および本人からの便り
42. 訃報
栗栖久宣君の御逝去を悼む
吉田クリニック産婦人科 林田 英樹 (医学科 昭和60年卒)
征矢敏雄先生の逝去を悼んで
放射線科 野村 邦紀 (医学科 平成元年卒)
野本君を偲んで
産科婦人科 藤村 正樹 (医学科 昭和62年卒)
野本努君へ
第一生理 田淵 英一 (医学科 昭和62年卒)
井上昭先生へ
第一内科 荒屋 潤 (医学科 平成6年卒)
井上昭先生 追悼文
第一内科 篠田晃一郎 (医学科 平成7年卒)
47. 平成12年度富山医科薬科大学関連病院長懇談会議事要旨
52. 平成12年度 第19回医学部同窓会総会議事録
54. 平成12年度行事報告・平成13年度行事予定
55. 富山医科薬科大学医学部人事消息
56. 職掌分担・評議員一覧
58. 短信
60. 編集後記



同窓会の皆様へ

医学部長 寺澤捷年

新年明けましておめでとうございます。

先日、同窓会名簿が届きました。懐かしい多数のお名前を発見し、元気な姿を想像しています。それにしても相当なマンパワーの集団であることを実感させられます。本学医学部医学科では今春20期生を、また看護学科は5期生を輩出します。医学科は成人式を迎えるわけで、感無量です。

昨年の夏に金沢に呼んで頂き、幹事役の橋本君、三輪君（2期生）をはじめ23人の「杉の子会」の皆さんと楽しい夕べを過ごしました。各地でこのような集まりがあれば嬉しいと思います。集まりの折にはどうぞ私にも声を掛けて下さい。遠路を厭わず参上します。

さて、大学を取り巻く状況も厳しさを増しています。平成16年には「独立行政法人」（独法化）に移行することがほぼ決定的です。独法化するメリットとデメリットが種々議論されていますが、独法化の目的は、要するに効率化、能率化を計ることであり、護送船団方式のぬるま湯的環境が排除されることは間違いありません。それが「大学」というものの在り方を大きく変えていくことになるでしょう。その結果が将来どう社会に反映されるのか？ その結果は約20年後に出てくるとは思いますが、私としては、決して楽観的なものではないと考えています。

しかし、今やその是非を論じている段階ではありません。本学の将来の姿について皆が如何に知恵を出すかが問題なのです。そして同窓会の皆さんの力をお借りしなければ、独法化後の対応は不可能なことだけは確かです。どうぞ宜しくお願い致します。

同窓生の皆さんにとって、この21世紀初頭の今年が輝かしいものであることを心より祈念致します。

医学と音楽

一人づくり・地域づくりー

会長 高田 良久

私の住む栃木県栃木市では、毎年10月 [蔵の街] 音楽祭が開催される。チェンバロ、フラウト・トラヴェルソといった時代を画した楽器や歌による音楽の祭典だ。地域住民と自治体の協同運営も特徴で、私も数年前から参加している。

こうした事業に関わる面白さは様々な人と出会うことだろう。例えば安田和信氏。レコード芸術誌や、最近では読賣新聞紙上でも活躍の気鋭の音楽学者である。あるいは桐山建志氏。あまり1位を出さないベルギーのブルージュ国際古楽コンクールで文句なしの1位を獲得。2000年春には、富山市の鹿島町教会でも凱旋公演を行った新進のヴァイオリニストである。そして同じくブルージュ1位に輝くフォルテピアノの小倉貴久子さんとホルンの塚田聡御夫妻の奏でる麗しいハーモニー。そうした出会いによって、私の世界は広がり潤いつある。

時に、ヘンデルはお好きですか。

ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデル。ヨハン・セバスチャン・バッハと並んで音楽室の壁を飾る大作曲家だ。共に1685年の生まれだが、正直な

ところバッハに比べヘンデルの影は薄い。わが家に並ぶCDも、バッハはヘルムート・リリングによる大全集172枚が鎮座在すが、ヘンデルはその4分の1にも満たない。

「食えない作曲家ですよ」

音楽祭で知り合ったヘンデル学者神倉健氏はほやく。人が悪いというのではない。ヘンデルには原稿執筆などの仕事が少ないというのである。

「今度いつ上京します」

ひょっこり電話をかけてきた神倉先生、藪から棒にそう言った。聞けば、この度ヘンデル晩年の傑作《テオドーラ》の新譜 (Archiv 469 061-2) が出たが、実に素晴らしい、買って損はない、というのだ。先生別にレコード会社の回し者ではない。音楽の豊かな情趣が思わず受話器をとらせたという趣である。

「テオドールという喘息の薬がありますが、テオドールですか」

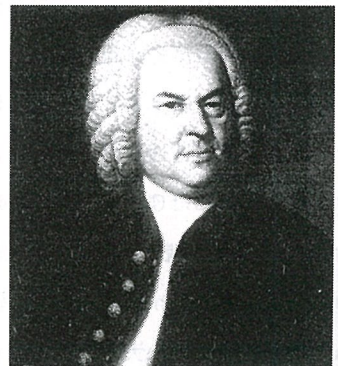
この切り返しにはさすがの先生も絶句だったが、先生の書かれたレコード芸術「海外盤試聴記」によれば、「オラトリオ《テオドーラ》；恋人と共



G. F. Handel
1685-1759



Takada Yoshihisa
1956-



J. S. Bach
1685-1750

にキリスト教に殉じた敬虔な乙女テオドーラの物語…《キャロライン王妃の葬送アンセム》と並んでヘンデルの全作品を通じてもっとも滋味に富んだ深遠な音楽」とある。よし、聴いてみようではありませんか。

しかし、J.S.バッハ没後250年記念に沸く2000年の東京は、演奏にオーケストラも合唱もそれぞれ2群づつを要する大規模な宗教曲《マタイ受難曲》が、同じ週にイングリッシュ・コンサート（イグコン）と、アムステルダム・バロックオーケストラで競演されるほどバッハ一色であった。神倉先生には申し訳ないが、私のようなミーハーファンはいきおいそちらに流される。先生だってお人が悪い。《テオドーラ》御推薦の数日後、余り趣味ではないとおっしゃっていた《マタイ》をイグコンの演奏で聴いて、バロックヴァイオリン界の新星レイチェル・ポッジャー嬢のオブリガート・ヴァイオリン（第39曲）が実に素晴らしかった、などと背中を押すようなFAXを入れてくる。実は彼はイグコンのファンなのだ。私もイグコンは好みだ。初来日の時、オールバッハプログラムの富山公演（故竹中祐博先生はじめ市民文化事業団の目利きが価値ある初物を富山へ招聘したのである）はもちろん、東京でしか開催されないイタリア音楽の夕べ、イギリス音楽の夕べを聴きに上京したことを思い出す。そんな話をしたら、神倉氏も同じ演奏会を聴きに五反田ゆうほうとホールへ行ったそう。奇遇というか因縁というか、世の中は面白い。まだCD化されていないイグコンの《マタイ》もぜひ聴いてみたい。

こうして私は《テオドーラ》と《マタイ受難曲》、ヘンデルとバッハの大規模な声楽作品を、相前後して傾聴する貴重な機会に恵まれた。おかげで、

小学校の音楽室以来名前だけはお馴染みだった両大家の作風の違いにより深く接し得たように思う。教会の礼拝という習慣に深く根ざした、言葉の強い力を感じるバッハの《マタイ》に対し、ヘンデルに感じる音楽の力。周知の「水上の音楽」や「ハレルヤ」をカニ雑炊に例えれば、ふぐ雑炊ともいうべき、淡泊ながら味わい深い《テオドーラ》。語弊を恐れずにいえば、モーツァルトやヴェルディのオペラに通じる音の陰影、音のドラマの魅力をヘンデルの作品がたたえていることを知り得たのは画期的だった。現代の脚光の浴び方の違いから、ともするとバッハの影に隠れがちなヘンデルだが、バッハに勝るとも劣らぬ独自の魅力がある。それを感じ得た経験は貴重だ。私は、これまで知らなかったヘンデルの世界に分け入る扉の鍵を与えてくれた神倉氏に感謝すると共に、出会いの契機となった文化事業を行う地域にも感謝した。

サンシティ越谷市民ホール芸術監督の坪能克裕氏は「地域文化振興の本質は、新しい人と人との結びつきによる文化の再構築だ」という（文化会館の聖母たち、音楽の友社、1999）。一人でCD屋に通うだけでは開き得ない音楽の世界を開くことができたのは、住む町の音楽祭で出会ったヘンデル研究家神倉健という「新しい人」との結びつきだった。文化事業は、そうした出会いの喜びに支えられるに違いない。多くの地域住民が様々な形でこうした喜びを手にすることができれば、地域は豊かになるだろう。しかしそこには陥穽もある。たとえば、地域の文化事業に参加することを、自己の地位や名声を得るための手段と思う人は、熱心な人をみな自分同様地位や名声を望む人と思うから、相手が熱心であればあるほど自分が脅かされるように感じ相手を敵視する。そして浅まし

く愚かしくも卑劣な誹謗中傷で相手を貶めようとするのである。彼らにはムラ社会の結束はあっても、世界を開く出会いの喜びへの共感はない。彼らの妬みや強迫観念は、ちょうど癌細胞の自己増殖が個体を死に至らしめるように、組織や地域を衰亡に至らしめるだろう。

開学四半世紀を経て、本学にも母校出身教授が生まれ、その力を内外に示すようになってきた。新しい人と人との結びつきは、単に芸術文化のみならず、学術研究医薬学教育にも通ずる地域文化振興の本質でもあろう。本学が、セクショナリズムや情緒的な排外思想などの癌細胞に侵されることなく、健全な発展を遂げることを願って止まない。結局、学術も、芸術も、人づくりなのだ。

岩手県立大学長、元東北大学総長西澤潤一先生は、エフェドリンを発見し、合成方法まで解明した長井長義先生、タカジアスターゼの高峰讓吉先生、破傷風菌研究の北里柴三郎先生といった独創的日本人を紹介し、国際化の目標を「日本人の持っている素晴らしいものを抜き出し、これにさらに磨きをかけ…世界の人たちが『素晴らしい』と言ってくれるようなものをつくり上げることではないか」と提言された（2000年10月14日明治神宮会館「21世紀への人づくり—今、明治時代に何を学ぶべきか」：産経新聞による）。本学開学二十周年記念シンポジウム「今、大学は何をなすべきか」（1995年10月14日本会主催）でも拝聴した西澤先生の一貫した主張である。

群馬大学生体調節研究所の武田純教授は、日本に研究材料があるのに同じようなものをわざわざ外国から高く買うことがある、と嘆かれた。

欧米人演奏家は有難がるが、日本人というだけで低くみる風潮はないだろうか。

音楽評論家高本秀行氏は、凱旋公演における桐山建志氏のバッハ無伴奏ヴァイオリンソナタ第3番の演奏を、「バッハが伝えたかったであろう旋律楽器一本が無伴奏で『完全なフーガ』が実現する雄大な構想、特にフーガで顕著な『声部進行』のアーティキュレーションの説得力の高さ！。「言うは易し」でこれほどの演奏を私は未だかつて聴いたことがない」と絶賛した。

日本人の独創性、日本にある研究材料、世界に冠たる日本人演奏家。その真正な価値を世界の基準で公正に見出し、共感を持って大切にできるか否か、そこにその人や組織、ひいては地域の実力があらわれよう。自他の個を公正に重んじるバランスの取れた知性や鋭敏でしなやかな感性を育み、思考と行動、努力と勤勉の価値を信じ得る、豊かな土壌を築くか、逆に、見せかけの横並びを平等とあがめ、一方で狭い世界の地位や名声に拘り、あげく差異をいじめのネタとして創造の芽を摘む、人の顔色しか見ない怠惰で浅薄な知性、鈍く貧しい感性、矮小卑劣な精神のはびこる不毛な土壌に甘んじるか、その違いがあらわれるに違いない。「今度いつ富山へ行きます」

神倉先生は言う。日本海側は未訪という神倉、安田両先生を、昨夏富山に御案内した。白エビはじめ種々の富山名物を「うまい。体内が浄化され頭の回転が早くなる」と御満悦で堪能された両先生だったが、御馳走以外にも何かを察知されたようだ。それは富山の清新の気か、豊饒の気か。

富山に、医科薬科大学に幸いあれ。昆布メと富山弁、立山連峰と日本海が無性に懐かしい今日この頃である。（桐山氏に感心のある方は、<http://www.01.246.ne.jp/~kiryama/>、小倉氏に感心のある方は<http://www.h2.dion.ne.jp/~kikukohp/>にアクセスを）